



合気道・アンソニー・ハイインド 合気会 カナダ

## 勝ち負けがないスポーツもあることがわかった

「ぼくが日本へきた目的は、合気道がすべて。ほかの外国人とはちがって、古いお寺とか禅にはぜんぜん興味がなくて、より深く合気道を知りたくて、六年前に来日しました」

アンソニー・ハイインドさん（31歳）は十六歳のときに、カナダのバンクーバーで合気道と出あった。学校の先輩から、けいこに誘われ、たちまちその魅力にとりつかれた。

「技のみごとさにおどろいた。しかも、動きがじつにきれいだと思いました。それまでは

ボクシングをやっていたのですが、パンチを受けて視力は落ちるし、ふだんでも鼻血がとまらない、頭がふらふらするなど、さんさんだった。それに、自己鍛練のつもりではじめたので、試合が好きじゃなかった。

その点、合気道は試合をやらないし、力をぶつけあうボクシングとは根底からちがっていた。合気道ではぶつからないように、相手の力を導いていくんです」

ボクシングと対比しつつ、

ハイインドさんはさらに次のようにもいつている。

「マイク・タイソンといえば誰もが知っているボクサーだけど、尊敬はされていない。

彼はたしかに強いけど、筋肉だけの強さなんです。合気道のなかにある道徳的な、心の強さのほうが重要だと、ぼくは思う」

来日後は、合気会の本部道場（東京都新宿区）で、くる日もくる日もけいこをかさねた。道場に住みこんでいたこともある。いまでも、けいこを欠か

さず、国際学校の子どもたちや大使館員など、在日外国人への合気道の指導も手がけている。

ところで、道場のなかも日本なら、その外もまた日本。そこにギャップは――。

「外の世界は、日本にかぎらず、どこも例外なく競争社会。みんな、ナンパーワンになりたがっている。それにいまの日本の若ものたちは、わるいことばかりアメリカのまねをするでしょう。だからこそ、合気道はたいせつなんですよ。」

試合をしないから優劣がつかない。しかも道場は、礼儀という人間の基本的なルールを学べる場所でもありますから――

午後のけいこをのぞいてみたら、きている人の半数近くが外国人だった。ところが早朝のけいこは日本人ばかり。やはり日本人は勤勉なのか。

「外国人がなまけものなんですよ。疲れてるとかなんとかいつて、朝けいこに出てこない。心が弱すぎるんじゃないのかなあ」

（食歴）

▼この日の朝けいこは、合気会道主・植芝吉祥丸さんが直接指導

